

戦中期における養老院の役割と処遇に関する一考察

鳥羽 美香*

Key Words：戦中期，養老院，軽費，物資不足，寮母

はじめに

わが国における養老事業の歴史の変遷に関する研究を継続的に実施してきている。筆者が所属する高齢者施設処遇史研究会¹⁾において、社会福祉法人浴風会浴風園²⁾の入所者の資料収集を中心として、全国の養老院の資料調査を行ってきた。

わが国において養老院から養老施設、養護老人ホームへの変遷において、特に第2次世界大戦前後の資料の多くは散逸、もしくは焼失している状況であり、現存している資料は非常に乏しい。前述の研究会においても、浴風園（東京）、神戸養老院（神戸）、同和園（京都）、札幌養老院（北海道）、府中清和寮（広島）等で資料を収集しているが、特に、戦中、戦後期は資料が充分ではない状況である。

以上を踏まえて本稿では、現存している雑誌の記事、養老院の年史などをもとに、主に1937（昭和12）年の日中戦争以降の戦時中の状況に焦点を当てる。戦時体制の時期に養老院の果たした役割、養老院において利用者の生活はどのような影響を受けたのか、それらを取り巻く状況について考察する。

なお、文中で、日支事変、支那事変、北支事変、大東亜戦争など、現在使用されていない用語が使用されているが、1930（昭和10）年代当時の資料

をもとに論述しているため、当時の表現のまま記述していることをお断りしておく。

1. 戦時下の養老院職員・入所者の状況

戦時中の養老院の入所者の生活ぶりや戦争の影響、職員の戦争に対する意識等について、以下に考察していく。

戦時中において、養老院の役割はどのように変化したのか、また入所者の生活への影響などについて、以下、全国養老事業協会が発行した雑誌『養老事業』から、抜粋して検討していく。

(1) 『養老事業』巻頭言より

「少人数の家庭に於てでもあるが、多数者を収容する施設に於ては物資配給の順調に運ばれない程不安なことはない。曾ては明日の飯米がないとて、職員が手を分けて一升二升買って歩いた話もある。」「近頃野菜の公定価が下がったとて、農家から市場に野菜を送らぬとて野菜難を訴へて居る」1941（昭和16）年³⁾

「新年ノ初頭ニ於テ謹テ皇軍将士ニ対シ感激ノ微衷ヲ表スルト共ニ護國ノ英靈ニ対シ感謝ノ誠ヲ捧ケ以テ迎年ノ辞トス」1943（昭和18）年⁴⁾

「舊来（きゅうらい）の養老事業は、貧困で身寄りのない老人を保護し老後を安らかに送らせるのがその目的であった。然るに決戦下の養老事業に対しては、其の目的、其の対象に於て従来のそ

*人間学部人間福祉学科

れに比し数段の飛躍が要求される」「舊来の養老事業の対象者は、貧困で身寄りの無いものに限られて居たのであるが、今日に於てはより広い範囲に於ける老人保護が要望される」「要之、戦時養老事業の使命は、独り、身寄りなき貧困老人の救護のみに止らず、一部庶民階層の老人の生活援護にも役立つことを期すると共に、一面戦力増強への協力といふ立場から、託老施設としての新しき任務を負ふべきものであることに留意しなければならぬ」1943（昭和18）年⁵⁾

「物資配給問題は此苛烈にして深刻なる決戦時下に於ける重要事項である。政府及当路者の苦心は容易でないことを察せねばならぬ。而して国民は皆共に第一戦に在るものとして、物資の不足に不平を唱へず進んで国策に順応せんことに努めねばならぬ」1943（昭和18）年⁶⁾

「大東亜の共栄圏を確保し、大東亜の平和を建設戦とする聖戦の最中に於て、茲に皇紀二六〇四年、昭和十九年の新年を迎ふ。我等国民は一億一心総力を挙げて戦闘配置に就き各自克く其の職責を盡し、敢て物資の欠乏を忍び、勇往邁進、聖戦の目的を完遂するに遺憾なからんことを期し、以て宸襟を安んじ奉らざるべからず」1944（昭和19）年⁷⁾

(2) 以下は同じ雑誌『養老事業』の「寮母日誌」に掲載された戦争に関連した寮母による記述である。

1937（昭和12）年

「新聞のニュースにより老人達に物価の高くなったことと反対に金利が下って生活も一體に苦しい様子皆さんもよく心得て辛抱して行かなくてはなりませんと言ひかしますと、老人達は何か働く事を考へて下されば、織物位は覚えていますと膝乗り出す老人もある」

「話している内に少し言ひ過ぎたかと思ったのは、もう死んでも不足のない者がこうして生きていれば何かと御心配をかけると云ふ人が一人あった」第11号1937（昭和12）年⁸⁾

「北支の事変はラジオによってお婆さん達にもひびき、千人針に心を込めて縫ひ、暑さに向かふの兵隊さんの事を思ひ、我々の除草は物の数でな

いといふ」第11号1937（昭和12）年⁹⁾

「日支事変は一般老人方も非常時を酷く気にされ、新聞ラヂオ全く涙なしでは見分出来ない事で、ニュースが始まると盲人の人達も皆ラヂオの下に集り緊張して聴取する」第12号1937（昭和12）年¹⁰⁾

1939（昭和14）年

「夕方、西の部屋に全部の老人を集めて興亜奉公日について話し、奉公日の心構へ及在園者としての行事等話す。～中略～六ヶ敷い事は兎も角戦場の勇士の方々を思つてと話す事が一番理解され易い様である。ラヂオを聞いている人、新聞を読んでいる人等は理解力もありてたすかる」第18号1939（昭和14）年¹¹⁾

1940（昭和15）年

「興亜奉公日¹²⁾に当り、例月通り実行す。時間は本日より変更され午前6時起床、室内屋外掃除の後、室に集りて大神宮様を拝み宮城遥拝、戦捷将士及英霊に感謝の黙禱を捧げ誓詞を朗読して少くとも本月1日は戦線を偲び不平不満を起さぬ様お互ひに授け合つて頂くことを願ひ致し～後略」

「慰問袋は老人達の気持ちの届く様に羊羹、黒飴、ドロップ、甘納豆、豆類、それから小さい子供達の好むビスコやピース類、紙風船、紙将棋類、雑誌など凡て喜んで頂ける様なものを揃へた」

「〇〇氏に甥宛に過日出した葉書返送されて来る。力を落とさない様、力づけ、且つ浴風園に安心して落ち着く様言ひ聞かせる。貴方が当園に落ち付いて息子さんの心を安ずる事は結局お国に御奉公になるのだから、立派な息子を、兵隊に出られる様な息子を持った事を心の誇りとして強く生き抜いてください」第20号昭和15（1940）年¹³⁾

1937（昭和12）年に日中戦争が始まり、物価が高くなったことや戦地を思い日常生活で困難なことがあつても辛抱することなど、寮母は老人に対し諭している様子がみられる。

老人からも、「織物位なら覚えている」と申し出があつたり、「もう死んでも不足のない者がこうして生きていれば何かと御心配をかける」と戦時下で何も協力出来ないことを申し訳なく思っている人もいたことがわかる。これに対しては寮母

も「少し言い過ぎたか」と反省している。

国民精神総動員運動の一環として1939（昭和14）年9月から始まった興亜奉公日についても、老人は寮母から説明を受けた。十分理解できる人ばかりではなかった様子であるが、それ以後、毎月奉公日には、園内の除草などの作業にも力が入っている様子がわかる。

また、戦地にいる息子を案じている老人に対して、寮母が「兵隊に出られる息子を持ったことは心の誇り」と励ましているのは、この時代の社会状況を端的に表している。さらに慰問袋や千人針等を心をこめて入所者が作っている様子も伺える。

以下は1943（昭和18）年の正月の「寮母日誌」¹⁴⁾の記述である。

1943（昭和18）年1月1日

「東天暁を破り次第に明け行く空に飛行機のうなりも勇ましく我空軍の守りを受け、茲に戦捷の新年を迎へた、我々はほんとに感謝あり断乎たる決意を以て踏み出さねばならぬと思ふ」

1月2日

「お屠蘇を献じお雑煮を祝ふ。陳皮の味を添えて汁を熱くしてお餅も柔かに心してよそひ付けて上げると一同大喜びであった」

「お雑煮をゆっくりいただいて後初夢のお話し食後の団欒これも皇国の民なればこそと感謝した」

上記の通り1943（昭和18）年の正月ごろは、戦況は悪化しつつあったものの、正月にお屠蘇やお雑煮が提供されており、養老院で正月を祝う余裕もあったことがわかる。しかしやはり「皇国の民」なれば感謝を忘れていないことをみても、「ぜいたくは敵だ」が情勢的にスローガンとなっていく中で、養老院の老人達はますます肩身の狭い思いをしていたのではないだろうか。

2. 養老院の役割の変化について

(1) 「銃後の守り」としての役割

福原（1943）は、戦時下の養老院のあり方について次のように論じている。「今日は前古未曾有の大東亜戦争の真最中で、国家の総力を結集し、この聖戦目的遂遂に邁進しているのです、あらゆる

方面では重点主義に則り時局即応の施設を講じている養老院に於ても軍人援護の主旨で出征又は応召軍人の家族、遺族の方々と老人を抱へて困難されているとか、鰥寡にして扶養をうくることの出来ない方々をお世話するとか、生産増強にいそしむ産業戦士、応徴戦士の家族、満州其の他外地開拓勇士、南方諸地域へ進出さる方々等の家族にして老衰した父母、祖父母などを抱へて孝養を蓋しながら、それぞれ国家奉仕の責務を盡すことできぬ場合に、委託を受けその老人のお世話をするとか、又この決戦下の経済機構や、人手の少い際に老人の生活は容易ならぬものがあるので、此等の人達も希望によってお世話をして余生を安穩に過ごされることとすれば、当人の生活上の不安が避けられることは素より、かくすることにより家族の人達も安心して国家奉仕にいそしむことができ、～後略～

上記の福原の論点としては、要するに戦時下の養老院は、戦士が安心して国の為に働けるように、その扶養家族である老人を援護していく機能を強化していかなければならない、といういわゆる「銃後の守り」を強化する施設としての位置付けである。

前述した、「養老事業の戦時対策」『養老事業』（第31号1943（昭和18）年）における養老事業の対象者の拡大についての論述、戦力増強への協力などについてと通ずるものがある。さらにいえば、小笠原（2013）も、戦争と高齢者施設の関連を論じる中で、「戦争は、世の中の雰囲気という強制力で、養老院の事業責任者にも、入所している老人にも、戦争協力を推し進めていった」と述べている。

(2) 軽費入所への対応

また、蘆澤（1943）は、今日の有料老人ホーム、軽費老人ホームの前身である軽費入園者の取扱いに至った理由として、次のように述べている。「支那事変の勃発となりさらに大東亜戦争の開戦となるに及んで、国民生活の困難は一層に其の度を加へ、就中老人の独り生活には大なる脅威が加はった」以下、蘆澤（1943）の論文から検討していくと、蘆澤は、従来の貧困状態にある鰥寡孤独の老

人のみならず、独居老人に対しても、戦時下における老人保護の観点から入所の必要性が高まったとの見解であった。

蘆澤はさらに、こういった状況は東京のみならず各地の養老団体に於いても同様ではないかと指摘しつつ、「わが浴風会に於ても、時局の進展に即慮し、新なる要保護老人層の不安を除去し其の保護に任ずる為め浴風園規則の一部改訂を行ひ、本園の施設を利用し得る範囲に於て不取敢軽費入園の途を開いた」と述べている。こうして戦時下における新たな養老院の機能として、軽費入所が取り扱われるようになった訳である。

さらに、従来の入園者との違いについて、蘆澤は2～3の事例紹介という形で紹介している。紹介された例をみると、①青年時小学校代用教員を勤めた後、実業学校、師範学校で教鞭をとっていた。退職後は恩給生活であったが、最近半身不随となったため入園、②アパート経営をしていたが、夫死亡後アパート売却、養女が入院のため入園、③夫は文部省に勤めていた、夫死亡後遺産と扶助料で生活していた子供が死亡したため入園、④日露戦争に出征金鵄勲章を下賜される。その後司法代書人として生活していたが妹の世話になっていた。

以上のように「軽費入園者を取扱って見ての感じは、予想通り一般入園者に比し我儘者の多い事は事実であるが、中には弱い人たちの面倒をよく見てくれたり」する者もいたようで、一方、「自分の前歴を自慢したがるものが多く」しかし「一般入園者に比し多少の余裕があるためなんとなく落ち付いたところがあり品のよいところもある」と一般入園者と比較しての軽費入所者の評価をしている。

これに関しては岡本（1986）も、養老院の自費入所の受け入れとして、戦時下、養老院に期待される役割が変化してきたことを背景として挙げ、「貧しく身寄りのない老人を収容保護すると同時に、入所対象を広げる必要が認められた」と論じ、「老人問題は必ずしも経済的側面のみで解決できるものではないことが、昭和10年代の養老事業関係者には理解されはじめた」と述べている。

これらにみるように、軽費入所に関しては、戦

時下で養老院の新たな機能であり、対象者としては、多少の資産はあるが、独居等の理由で、自宅で世話が困難な老人である。これらの受け入れを行ったことがきっかけで、それまでにはなかった自費（軽費）の入所という形態が出現したことは意義があったと思われる。確かに岡本の指摘通り「老人問題は必ずしも経済的側面のみで解決できるものではない」ことが戦時中に図らずも露見し、それに対する対応がなされた。また、ある意味今日の高齢者問題に繋がる課題の出現であったと思われる。

3. 戦時中の物資不足と食糧難、人手不足等について

(1) 戦時中の物資不足や食糧難等について、各地の養老院の状況を年史等でみていきたい。

1942（昭和17）年6月、同和園（京都）では、関西2府14県養老事業研究会¹⁵⁾において、石井主事が米のことで、従来は1人1日3合強であったのが、配給になって2合1勺と3割減少したことに触れ、実際のところ今日不足している状態であるが「老人達は現下の時局を能く認識してきましたので、表面上別に不平を漏らしてはいませんが、この先き余命いくばくもない人達だから、おいしい食物でも腹一杯食べさせてやったらと思ひますが、老人達はかういふ時節だから仕方がないといふやうな考えを持っているやうである」と報告している。

米は1941（昭和16）年4月から、東京、名古屋、大阪、京都等主要都市で配給制となったことから、養老院においても切実な問題として報告されていたことがわかる。

1942（昭和17）、1943（昭和18）年と戦争が拡大していくにつれ、食糧事情も悪化していき、1943（昭和18）年に実施された「養老事業研究懇談会略記」¹⁶⁾によると、前橋養老院長の話として「最近になり（配給が）1合6勺となりましたが、これは老人でも困ります。又じゃがいもをとり入れ、日に1回のお粥の中に入れて食べさせています。～中略～これは結局戦争に打ち勝つ為であり、又空腹の時が気持ちが良いと言ひ聞かせ

ている」と述べており、戦争協力として、食糧が減らされても不平をいわぬようにと職員が苦心していたことがわかる。

また、石炭の配給が少なく、風呂が1週1回になったという。千葉養老院の職員の話としては、「千葉県は野菜産地ですがなかなか思ふ様に行きません。食糧が不足の為でせうか、此の頃は外出が多くなりました。外出する度につまらないものを手に入れて来て中には黴の生えたものを食べますので近頃は1週間に1度の外出許可としている」との話があった。

聖心聖マルグリット養老院（東京）の職員からは「食事の時は井に入れています。井が重いので、多いと喜んでいますが、馴れると足りないと言ひ始めますが、兵隊さんの苦労を思ひ、満足しています」とあり、また、衣類は木綿が不足して絹物を着せているという話があった。

東京老人ホームでは、「油も卵も配給になっています。魚も頂ける」とあり、衣類は関東大震災の際に寄付を受けたものを整理してやりくりしているとの話であった。

1942（昭和17）2月から衣料品も切符制となり、また前述の通り石炭不足により複数の施設で風呂の回数が減って、1週に1回となっている。非常に厳しい状況になってきているにもかかわらず、食糧が減らされても不平をいわぬように職員からの言葉掛けがあったり、一方で老人達も文句は言わず、「兵隊さんの苦労を思って満足」といった記述がある。戦争末期に於いては養老院においても生活のあらゆる面で戦争協力を強いられ、耐乏生活をしていたことがわかる。

また、上記は東京近郊の状況であるが、一方札幌養老院（北海道）では、また状況が異なっている。1941（昭和16）年の記述として、「あいにくこの年は大凶作であった。米麦は国家管理が実施され、通帳制となり、生鮮魚介まで配給制になった。～中略～配給は大人1日2合3勺で、10日ごとに配給店に引き取りに行かなければならなかった。80人分ともなれば相当重く、夏は大型のリヤカー、冬はソリを使い、元気のよいお年寄り3、4人が組となってこの仕事に当たっていた」「こうした苦労の生活の中で救われたのは、養老院所

有の畑3,000坪の利用であった。傾斜地である上に瓦礫があつたりしたが、食糧難の折からすみずみまで耕作した」ということで、北海道の広大な土地の利点を活かし、元気な老人や身体の弱い人もそれぞれ仕事をして、春秋を通して豊富に野菜がとれたという。これらの作物はまさに「天の美祿」として生きたという¹⁷⁾。

(2) 戦時中の労働者不足

戦時中は養老院において人手不足も生じていた。前述の札幌養老院（北海道）などでも、戦時中は職員が減る一方で、補充をしたくても人が来なかったという。1939（昭和14）年7月に国民徴用令が公布され、軍需産業へと徴用が促進されたことが大きな影響となっていた。

浴風園（東京）によると、「更に戦争による労働力の不足の結果、働ける老人には各方面から雇用の申し込みがあり、収容人員は低下の一途を辿った。しかし一方に於ては、入園出願者は漸増している。このことは戦争で、一般社会の状況が混乱し始めていたことを示すものではあるまいか。」¹⁸⁾とあるように、労働力として高齢者が社会から必要とされる状況が生じていたことがわかる。

(3) 防空演習・防空壕掘り・空襲・疎開等

1937（昭和12）年同和園（京都）では、「昨夜防空演習ナルガ為メ入浴ヲ従業員以外中止ニナシシモ、信号ノ鈴鳴ラサルニ勝手ニ一部入浴ヲナシタルニ依リ之ヲ中止ス」¹⁹⁾とあり、このころすでに防空演習をしていたことがわかる。また、さらに1944（昭和19）年には「防空壕掘りに従事員勤労」、「老婆数名の手伝ひの下、寮母等防空用砂袋、頭巾、手袋等作成す」、「〇〇、〇〇、〇〇、〇〇（それぞれ人名）、各退避壕掘りに従事す。本日中に20名収容力あるもの4カ所を掘る」²⁰⁾とあり、防空用砂袋、防空頭巾等も老人の手伝いで作成したり、防空壕掘りに従事する職員がいたことがわかる。

また戦時中に養老院に入所していたある老人は、「みんないつでも避難できるように身支度をしていて、係の人が赤や黄の旗を持って「空襲」って廻っ

て来るとみんなが、その旗のところ集って、それからゾロゾロと裏山の林の中だとか前庭の大木の下だとか、係の人のいうところに逃げた」²¹⁾と当時の防空演習の様子を説明している。

小笠原（2013）によれば、空襲で焼失した養老院は数は少なかったというが、広島養老院は原爆で全焼、また東京養老院、前橋養老院、名古屋東山寮、和歌山仏教厚生会等が空襲に見舞われたという。

また、1944（昭和19）年になると、「施設の分散、疎開も一つの問題となった」²²⁾とあり、実際に聖ヒルダ養老院（東京）などは1945（昭和20）年3月に強制疎開している。

さらに、浴風園（東京）も疎開こそしなかったが、1942（昭和17）年9月には、陸軍中央通信部によって、建物の一部が接收を受けている。しかし在園者の数は、戦時中の死亡率の上昇で、大幅に定員を下回っていたため、運営上大きな影響は受けなかったという²³⁾。

おわりに

戦時中を中心に養老院入所者の生活や職員の様子、養老院の役割の変化等について考察した。

前述のように「もう死んでも不足のない者がこうして生きていれば何かと御心配をかける」と戦時下でも何れも協力出来ないことを申し訳なく思っている老人もいた。また少しでも役にたつようにと、慰問袋や千人針、防空頭巾等の作成、畑仕事等、食糧のない中肩身の狭い思いをしながら、窮乏に堪え生活していたことが改めてわかった。

さらに、1944（昭和19）年の小石川区音羽方面事務所長の話として、「従来養老院と言へば居宅救護を受けている人は嫌がったが、最近は返って配給等の問題からして1日も早く収容させてくれと言ふ様になった」²⁴⁾という。このことから、食糧難、物資難の中、緊急避難的に養老院の入所を希望する者が増えたといえる。また、本文にもあるように、この時期の養老院は、従来の対象者だけでなく、「軽費」として、自費でもよいので、「独居」などのため入所を希望した老人も多くいたことがわかる。

戦争によって、経済的側面ではなく、「独居」など、家族の事情によって、自宅での世話が困難、という老人に対する支援の必要が顕在化し、それに対して当時の養老院は対応していたことが考察できた。

注

- 1) 高齢者施設処遇史研究会は、2005（平成17）年より、主に戦前期の養老事業に関する研究を実施している。主なメンバーは、小笠原祐次（社会福祉法人多摩同協会）、岡本多喜子（明治学院大学）、中村律子（法政大学）、西田恵子（常磐大学）、中村英三（長野大学）、鳥羽美香である。
- 2) 浴風園は1923（大正12）年に起きた関東大震災の被災高齢者の援護を目的に皇室の下賜金を含むに義捐金をもとにして内務省社会局の手により財団法人として1925（大正14）年に設立された。
- 3) 日需物資統制令の完備を望む 養老事業 全国養老事業協会、第24号、1941、1頁。
- 4) 迎年ノ辞 前掲新年号（第30号）、1943、1頁。
- 5) 養老事業の戦時対策 前掲第31号、1943、1頁。
- 6) 今日の問題 前掲第32・33号、1943、1頁。
- 7) 窪田静太郎。新年の辞 前掲第34号、1944、1頁。
- 8) 寮母日誌抜抄 前掲第11号、1937、51頁。
- 9) 前掲 前掲第11号、1937、58頁。
- 10) 前掲 前掲第12号、1937、51頁。
- 11) 寮母日誌 前掲第18号、1939、45～46頁。
- 12) 興亜奉公日とは、日中戦争下、国民精神総動員の運動の一環として生活規制・戦意高揚がはかられた日であり、1939（昭和14）年9月1日から毎月1日に設定された（広辞苑第6版、2008、923頁）。
- 13) 寮母日誌抜抄 前掲第20号、1940、59頁。
- 14) 寮母日誌 前掲新年号（第30号）、1943、37頁。
- 15) 昭和17（1942）年6月、大阪府社会事業会館において、全国養老事業協会・大阪府厚生事業協会主催で実施された。
- 16) 養老事業研究懇談会略記 養老事業32・33号、

- 1943, 30～36頁.
- 17) 養老の道をたずねて半世紀 社会福祉法人札幌慈啓会, 1982, 108-109頁.
 - 18) 浴風会創立四十周年記念誌 社会福祉法人浴風会, 1967, 28頁.
 - 19) 同和園七十年史 社会福祉法人同和園, 1997, 233頁.
 - 20) 前掲 社会福祉法人同和園, 1997, 280頁.
 - 21) 養老の道をたずねて半世紀 社会福祉法人札幌慈啓会, 1982, 116頁.
 - 22) 養老事業第34号, 1944, 34頁.
 - 23) 浴風会創立四十周年記念誌 社会福祉法人浴風会, 1967, 29頁.
 - 24) 養老事業第34号, 1944, 36頁.

引用文献

- 蘆澤威夫 (1943). 軽費入園者を取扱ひて, 養老事業 32・33, pp8-12.
- 福原誠三郎 (1943). 養老院の再認識, 養老事業 32・33, p7.
- 小笠原祐次 (2013). 戦争と高齢者施設一戦中の養老院の暮らし・もう一つの銃後, ゆたかなくらし 376, pp18-23.
- 岡本多喜子 (1986). 老人ホームの歴史, ゆたかなくらし 57, p80.

(2016.9.28 受稿, 2016.11.7 受理)